

## 主 文

本件上告を棄却する。

当審における訴訟費用は被告人の負担とする。

## 理 由

弁護士杉原尚五の上告趣意は、原審は被告人の弁護権を不当に制限したのは違憲であると主張するが、原審においては控訴趣意書提出最終日を昭和二十七年一月十日と定め、被告人選任の弁護士仁礼愛之及び被告人にこれを通知した。しかるに被告人からは控訴趣意書の提出があつたが、右弁護士からはその提出がなかつた。

その後二月五日右弁護士は辞任届を提出したものである。この辞任と同時に後任弁護士を選任したとしても同弁護士は最早控訴趣意書を提出することは許されないし、公判期日に選任された国選弁護士福源文夫は被告人提出の控訴趣意書に基き弁論をしているのである。それ故弁護権不当制限の事実は存在しないから違憲の主張は前提を欠く。また被告人の上告趣意は事実誤認、量刑不当の主張である。論旨はすべて上告適法の理由に当たらない。また記録を精査しても同四一条を適用すべきものとは認められない。

よつて同四〇八条一八一条により主文のとおり判決する。

この判決は、裁判官全員一致の意見である。

昭和二十七年十一月二〇日

最高裁判所第一小法廷

裁判長裁判官	真	野	毅	
裁判官	斎	藤	悠	輔
裁判官	岩	松	三	郎
裁判官	入	江	俊	郎